中世山寺の基本構造――三河・尾張の例から――

上川通夫

はじめに

中世の山寺研究が新段階に入っていることは間違いない。一九七〇年代後半ごろから新展開した中世寺院研究は、主に平地に所在する権門寺院や村落寺院を対象とする場合が多かった。山地に位置する寺院の場合も、立地の特質はそれほど議論されなかった。寺院組織の復元的解明や、政治史、荘園史、村落史との関係に主関心が持たれたからであろう。近年、時代の歴史的特質を探究するという関心を一層深める自覚のもとに、山寺研究が進展していると思われる。

近年の山寺研究を牽引しているのは、考古学研究である。すでに各地での蓄積は多く、研究動向を知るための企画もある。『佛教藝術』二六五（二〇〇二年）「特集・山岳寺院の考古学的調査 西日本編」、『同』三一五（二〇一一年）「同・東日本編」、『季刊考古学』一二一（二〇一二年）「特集・山寺の考古学」のほか、研究動向への案内書や個別寺院の概説書も出版されている。[1] 自治体などが本格的に調査する山寺も増加している。[2]

この稿では、文献史学の立場から、中世の山寺について考察し、三河国と尾張国の諸例を素材としつつ、中世山寺の構造的特質について、粗々の試論を提示してみたい。その際、先行する考古学との接点として、平地や村里が山寺と密接な関係にあることを主張した研究を継承したい。

上原真人氏は、主に古代の山寺を対象に、平地の官大寺・国分寺と周辺丘陵の寺院が関係深いことを、同范瓦などを

証拠に解明されるとともに、山寺の多くは里山に立地していることを指摘された[3]。久保智康氏は、国境付近に山寺が分布することに着眼して、国衙の行政との関連を推測され、山寺の麓二、三㎞の距離には神社などの祭祀場とともに村里が営まれている実態を指摘された[4]。両氏の研究は、山寺について、人里離れた脱俗空間としてのみ認識しがちな固定観念への反省を迫る。同時に、寺院は社会生活の場だと指摘する中世史研究との接点だけでなく、環境史を組み込んだ里山と里人の生活史に注目する近年の中世史研究と結びつく。山麓ないし平地の里人の生活が、里山（史料では「後山」）の資源と不可分に営まれた実態が、文献史学によっても解明されている。水野章二氏による一連の研究は、中世の山寺研究を強く刺激する[5]。里山の寺院と村落の関係を解明する研究課題は、すでにはっきりと提示されている段階だとすべきであろう。

この稿で扱う三河国と尾張国については、考古学の研究蓄積が厚い。『愛知県史資料編４　飛鳥～平安・考古４』（二〇一〇年、愛知県）は重要な研究基盤である。三河には山寺が多く、岩原剛・村上昇「三遠国境の中世山寺遺構」（『季刊考古学』一〇七、前掲）や岩原剛「三河の山岳寺院（愛知県）」（『佛教藝術』三一五、二〇一一年）のほか、三河山寺研究会・三河考古学談話会『三遠の山寺』（レジュメ集、二〇一〇年）も充実している[6]。湖西市文化財調査報告集第40集『湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書』（二〇〇二年、静岡県湖西市教育委員会）にも関連資料・論考が多い。考古学では本尊への関心がいずれかといえば薄いが、仏教史や美術史の研究との接点を深めることで有効性が強化される。『愛知県史資料編14　中世・織豊』（二〇一四年、愛知県）に集成された中世以前の縁起類や、『愛知県史別編　建造物・史跡』（二〇一四年、愛知県）、『愛知県史別編　彫刻』（二〇一三年、愛知県）は、この点でも重要である。

なお、中世の山寺研究では、海・港湾・岬への視点が全般的には概して弱い。この点、永原慶二「戦国期伊勢・三河湾地域の物資流通構造」（同『戦国期の政治経済構造』一九九七年、岩波書店）や綿貫友子「尾張・参河と中世海運」（同『中世東国の太平洋海運』一九九八年、東京大学出版会）などに学ぶ点は、本論で述べるとおり、非常に大きい。

一　『普門寺縁起』と里山寺の構造

山寺には観音菩薩を本尊とする例が多い。山地の占める割合が多い三河国の場合、薬師如来とともに観音菩薩が目立つ。[7] 薬師悔過や観音悔過など、悔過を基軸とする古代仏教に由来し、また地方に扶植された天台勢力の名残であろう。遺跡における伝承を含めて、東三河では、普門寺（豊橋市雲谷町）、竹篦山普門寺跡（豊橋市嵩山町）、大岩寺（豊橋市大岩町）、東観音寺（豊橋市小松原町）、泉福寺（田原市山田町）、石神観音（田原市旧渥美町）、財賀寺（豊川市財賀町）、長富寺跡（豊川市赤坂町）、冨賀寺（新城市中宇利）、坂津寺（豊橋市牟呂町）、今水寺跡（新城市八名井）などがある。西三河では、平勝寺（豊田市綾渡町）、小馬寺（豊田市牛地町）、全福寺跡（蒲郡市相楽町）、三箇根寺（西尾市東幡豆町）、龍田院（豊田市古瀬間町）などがある。[8]

観音を本尊とする中世の山寺を考える際、念頭に置く必要があるのは、すでに十二世紀の日本に仏教聖地としての山寺への認識が高まっており、著名な観音霊場が日本の山寺に定着していることである。十二世紀後期に編集された『梁塵秘抄』[9]には、インドや中国の山岳聖地が連呼され、比肩する日本の聖地が挙げられている。「勝れて高き山、須弥山耆闍崛山鉄囲山、五臺山、悉達太子の六年行ふ檀特山、土山黒山鷲峯山」（三四四）、「勝れて高き山、大唐唐には五臺山、霊鷲山、日本国には白山、天台山、音にのみ聞く蓬莱山こそ高き山」（三四五）、という今様である。また、「聖の住所はどこ〳〵ぞ、大峯葛城石の槌、箕面よ勝尾よ、播磨の書写の山、南は熊野の那智新宮」（二九八）と歌われ、日本仏教の聖地たる山寺に、観音霊場の占める位置は高いことが察せられる。

しかも同時に、観音が南海の補陀落浄土の教主であることを確認し、信仰者をそこに誘う歌もある。「観音大悲は舟筏、補陀落海にぞうかべたる、善根もとむる人しあらば、乗せて渡さむ極楽へ」（三七）、「観音深く頼むべし、弘誓の海に船うかべ、沈める衆生引き乗せて、菩提の岸まで漕ぎ渡る」（一五八）、という周知の今様である。補陀落浄土への

【地図】尾張国の山寺と関係地

「特別付録・輯製二十万分一図復刻版愛知県全図」「同三重県全図」（『日本歴史地名大系23愛知県の地名』1981年、『同24三重県の地名』1983年、平凡社）をもとに寺院名・地名を加えた。

信仰は、『華厳経』に根拠があり、新訳（七世紀、八十巻本）では「光明山」、旧約（五世紀、六十巻本）では「補怛洛迦」として見える。[10] 観音浄土たる補陀落山への信仰は、補陀落渡海なる実践行となる場合が、十二世紀には確かめられる。補陀落渡海はやや特殊だとしても、観音菩薩を海域の救済者に位置づける言説が、『法華経』「普門品」（『観音経』、四世紀初）にある。「大水のために漂わされんに、その名号を称えば、即ち浅き処を得ん」、また「金、銀、瑠璃（中略）の宝を求めんがために大海に入らんに、たとえ、黒風その船舫を吹きて、羅刹鬼の国に飄わし堕しめんに、（中略）観世音菩薩の名を称えば、この諸の人等は皆、羅刹の難を解脱るることを得ん」、とある。水陸の難から通行者や商人を救う内容は、海域生活者の信仰的よりどころを背景にもっている。[11] 正統の経典思想は、十二世紀日本に実態的な接点をもっていた。

『舩形山普門寺梧桐岡院闍闢之縁起由来』（以下、『普門寺縁起』と略称する）は、天文三年（一五三四）に書かれた。[12] 衰退する寺勢の再興意図による作文だが、歴史的背景と思想的意味づけには軽視できない特徴がある。

神亀四年（七二七）に行基がこの地に立ち寄り、「山高聳而西嵐颯々」などの風景に、釈迦成道の風情との類似を感じて、寺院建立を志したという。その際、自ら「浦陀洛世界主」と名乗る観音菩薩の告を得てその容姿を本尊像に刻み、山の形姿によって山号を船形山に、また観音菩薩にちなんで寺号を普門寺としたという。[13] 船形山普門寺は、補陀落浄土から渡海する観音菩薩に似つかわしいだけでなく、「一切衆生苦海運載表二器物一、施二大悲深重霊徳一名字」ともいう。「臨二南面一江河渺々波濯二煩悩業苦之垢一」と述べる部分もあり、太平洋（遠州灘）の実景も裏づけになっているのであろう。

縁起には、里人の生活と関係深い記述がある。船形山に散在する巨岩の一つ、「貝吹岩」は、大衆の衆会や、火盗の難に際して、貝を吹く場所である。そのことで、「近辺道俗打寄令レ降二伏其難一」という。寺僧らと里人にとって、共通の施設であることに注目される。また、東西に峰が並ぶ船形山の西側を「雨応之峯」といい、ここが観音菩薩をまつる「西谷」とも呼ばれる拠点である。「往古繁昌刻」にはここに「時太鼓」を打つ「太鼓鉤」なる岩があった。また西峰で

は、旱魃の時に請雨法を修すという。また本堂（東峰ヵ）近くに「湖水池」があり、「文覚祈水」だという。平安末期・鎌倉初期に活動した文覚の伝承について、真偽は確かめられないが、紀伊国桙田荘の文覚井のことも思い合わされる。源義朝の舎弟たる化積上人が、頼朝時代に普門寺を発展させたという縁起の内容をも含め[14]、なお追究すべき点が残る。しかも発掘調査によると、東峰の「元堂跡」と呼ばれる平場には、本堂跡基壇のほかに池あとがあり、絶えず湧き出る豊富な水が確認されている[15]。文覚祈水と関係があろう。

『普門寺縁起』からは、里山の寺と村里との関連が読み取れる。この構造は、中世前期に形づくられていたと考えられる。考古学調査によって、船形山の南側斜面一帯には、大小の平場が二百か所以上確認されており[16]、ほとんどが十二、十三世紀の造成だという。院坊をはじめとする生活・信仰施設の拡がりが推測される。住僧らの出身地として第一に想定されるのは、山麓膝下の地域であろう。この推定には、十二世紀半ばにさかのぼっての根拠がある。普門寺に関係する久寿三年（一一五六）銘の銅経筒二基、平治二年（一一六〇）銘の梵鐘、永暦二年（一一六一）銘の僧永意起請木札があり、別稿で論じたように、これらは古代寺院から脱皮して、中世寺院として再生した段階で作成された備品類であった[17]。銘文の分析によれば、山寺再生の真の主体は、膝下村落の住民集団であって、子弟を寺僧として送った里人らが、設営した山寺を結集の拠点として地域秩序の構築を図った、という事情が読み取れる。

普門寺に見られる里山寺院のあり様は、ある程度は一般的に見られる、中世寺院の型の一つなのかもしれない。具体的な検証作業はすべて今後の課題だが、いくつかの荘園絵図に、里山寺と村里の構造を垣間見ておきたい。絵図作成の主目的とは別に、意味ありげに山寺を描き込む例が散見される[18]。

【図１】伯耆国東郷荘下地中分絵図（十三世紀半）には、山寺と集落と耕地がくっきりと描かれている。山麓、集落との接点らしき位置に神社があることは、久保智康氏の指摘にも当てはまる。【図２】播磨国鵤荘絵図（至徳図、十四世紀前半）は、平地に敷かれた条里に特徴ある図だが、山寺が無意味に描かれているとは思われない。人里離れた修行場というより、ここには描かれていない集落との関係で、実際に存在理由があったはずである。

図１　伯耆国東郷荘下地中分絵図・東大模写本、部分（東京大学史料編纂所蔵）

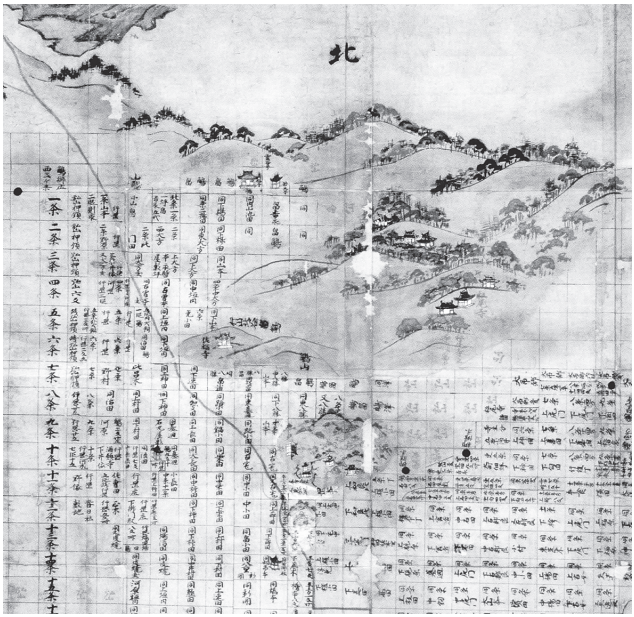

図２　播磨国鵤荘絵図・至徳図、部分（法隆寺蔵）

関連して、平地の寺院についても一例を見ておく。大和国西大寺は、中世においては農村的小寺院として、周辺百姓が寺僧として入っていたとの指摘が知られる。[19]【図３】大和国西大寺与秋篠寺堺相論図（十四世紀前半）には、耕地や灌漑施設とともに、背後の山が明確である。秋篠寺の方には、在家集落が描かれている。平地の寺院においても、山、在家、耕地との一体性が認識されている例であろう。

二　『東観音寺縁起』と海

東観音寺も観音菩薩を本尊とする山寺である。[20]しかし何といってもその個性は、海と間近に結びついていることである。宝永四年（一七〇七）の津波被害にあって、北方一・九キロメートルの現在地に移ったが、もとは渥美半島南端を東西に走る伊勢街道に沿い、太平洋に臨んでいた。中世末期に描かれたと思われる【図４】『東観音寺古境内図』には、その実景と理念が込められている。図の下方（南）には、五艘の船や網を引く人々、諸人が往来する伊勢街道などが、門前の繁栄を映している。段丘を縫って登る参道によって、一段と高い平場の本堂に到達する。本堂背後の山は、中腹に雲をたなびかせた高山として描かれている。

『東観音寺縁起』は大永六年（一五二六）の奥書をもつ。[21]立地と情景

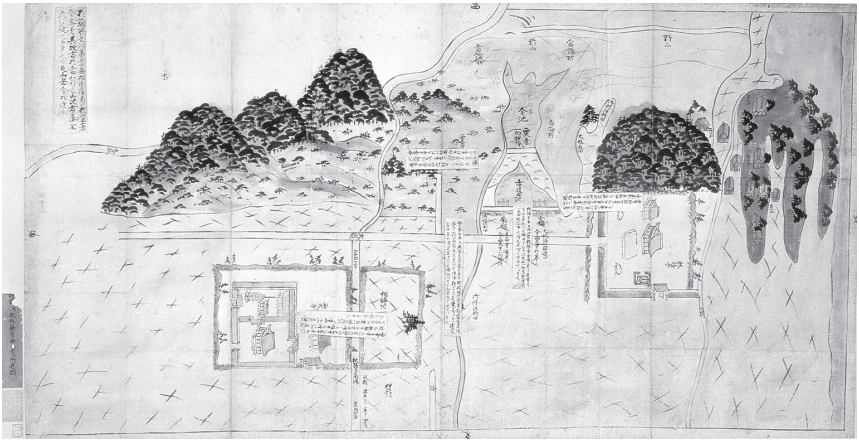

図３　大和国西大寺与秋篠寺堺相論図・東京大学蔵図（東京大学文学部蔵）

については、「堂背青山峨々」「門前之滄海漫々」「釣魚之徒繋レ舟曝レ網」などと述べられている。「東観音寺者即南海補陀洛也」とあって、観音浄土と直結されている。寺院建立の由来は、天平四年（七三二）に僧行基が熊野参詣し、権現の本地を拝したいと願ったことに始まる。行基は、観音の告によって「参河国渥美郡小松原沙村」を指示され、そこで観音の化身から霊木を感得し、馬頭観音を彫って安置したという。山寺の観音は、渥美半島南端の海浜空間を挟んで補陀落山と相対しているとともに、東観音寺が補陀落山であるかのような位置づけである。この南北軸とともに、伊勢街道と太平洋海運によって、東西軸が実際上にも縁起上にも意味をもっている。熊野権現と東観音寺本尊は、三河湾と伊勢湾を挟む二拠点であるだけでなく、太平洋海運の拡がりの中に位置づけられているかのごとくである。そのことは、縁起末尾に列挙された鎮守神に、熊野権現、伊勢神冥、伊良湖大明神、住吉大明神、熱田大明神、伊豆権現、箱根権現、三嶋大明神、鹿嶋大明神が見えることにも表れている。(22)

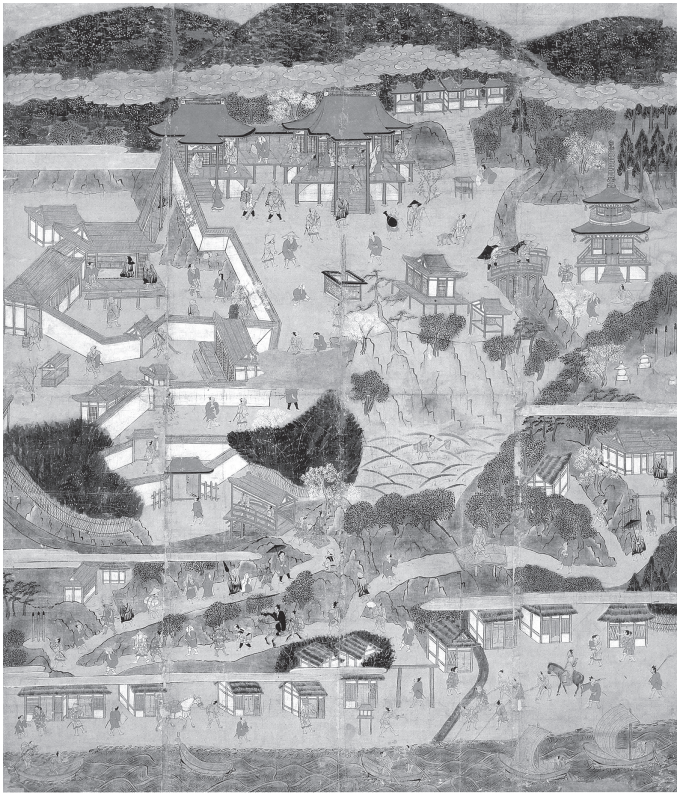

図４　東観音寺古境内図（東観音寺蔵）

東観音寺には、十二世紀後半制作と推定される木像阿弥陀如来坐像や、文永八年（一二七一）の「当地頭藤原朝臣泰盛勧進」といった銘のある金銅馬頭観音御正体などが伝わるが、中世前期についてはあまりわからない。やはり、十六世紀前半頃からの一大発展と、それが太平洋海運と密接であったこととを、想定してよいのではなかろうか。

東観音寺文書には、有力武士の権力的支持によって、領主寺院として機能した姿を示す内容がある。天文五年（一五三六）六月十五日の戸田宣成寄進状[23]は、地元武士の戸田氏が伊勢街道の赤羽郷に設けた関について、関銭徴収権を東観音寺に寄進したものである。一般の通行者からは六十銭、道者（巡礼の組織者）は十銭、順礼（巡礼者）は五銭、高荷（運搬荷物）は二十銭、乗懸（馬）は十銭という関銭額が示されている。熊野・伊勢と東観音寺を結ぶ巡礼を核として、東西に拡がる物資輸送者からの多額の関銭が、東観音寺の興隆を支えたのであろう。『東観音寺縁起』は、この地はもと「漁夫海漁汚穢之沙村」だったと述べ、漁業生活者への蔑視は覆い隠せない。興隆の担い手は地元の武士領主集団であろう。

通行者にとっても、関銭は安全保護の代償として支払われたのかもしれない。戸田氏に代わって進出した今川義元は、天文十七年（一五四八）九月二十一日の寄進状で、「門前漁船五艘」を守護使不入の特権として保障している。直接には船籍を東観音寺に置く漁船のことであろうが、行き交う諸地域の船が門前海浜に接岸することで、通航保障を得る仕組みを伴ったのではなかろうか。

赤羽郷の関銭は、陸路伊勢街道に設けられており、東観音寺の十二キロメートル余り西方だが、東観音寺による海運経済への関与にも結びついていたと考えられる。『東観音寺古境内図』に描かれた五艘の船のうち、帆を張る二艘には俵が積まれている。他の三艘は、櫓を漕いで人を運ぶタイプのようである。その一艘が無人であることは、陸路通行や東観音寺参詣との連接を意味しているのではなかろうか。

十五世紀には、熊野と東観音寺は、補陀落山に相似た観音聖地としての巡礼拠点であり、その実質は伊勢湾をまたぐ二拠点間を重要航路とする、海運経済の興隆にあった。海運にとっては、港湾こそが拠点である。しかし中世では、熊

野と東観音寺という、仏教聖地を重視している。東観音寺に即していえば、海運の拠点として山寺が存在するのである。

東観音寺に見られるような、山寺と海の一体性は、決して特殊例ではない。いくつかの例を瞥見しておきたい。

紀伊国の熊野三山は院政期に急成長するが、中でも那智神社は補陀落山信仰の性質と関係深い海浜の山寺だといえる。天福元年（一二三三）三月七日に、那智海岸からもと御家人下河辺行秀（出家して智定坊）が補陀落渡海に出たことは、『吾妻鏡』同年五月二十七日条の記事によってよく知られている。【図5】は、中世末期・近世初頭の『那智参詣曼荼羅』の一例である（補陀洛山寺蔵）。社殿の前庭右側に、懸崖造りの如意輪観音堂が、南海を臨む位置に設けられていのがわかる。図の下方、鳥居の手前岸に補陀落渡海への出発場面が描かれている。そこは補陀洛山寺の門前である。また東西に木組みの門を構えた、関所そのものであることがわかる。那智の本地観音は、山上と山下の二拠点をもち、水陸交通の関門を補陀落渡海への結縁に包摂する仕組みであった。

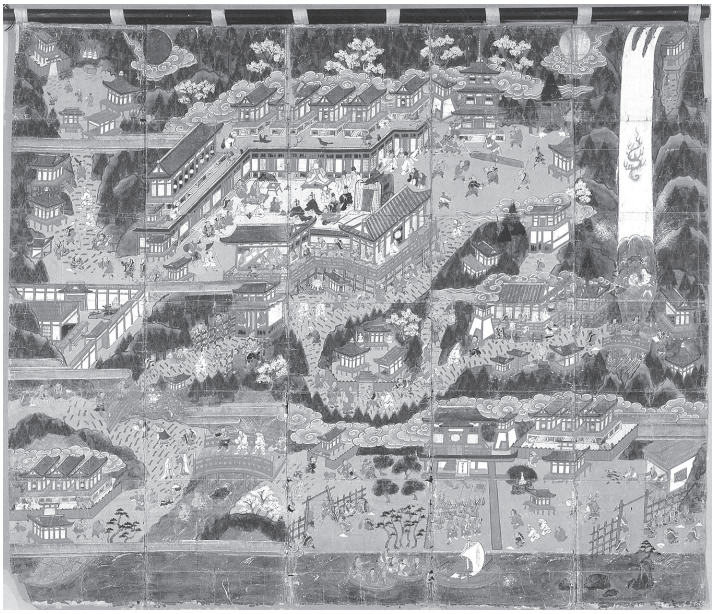

図5　那智参詣曼荼羅（補陀洛山寺蔵）

和泉国施福寺は、『日本霊異記』に「茅渟山寺」（中巻第十三）、「血努上山寺」（中巻第三十七）と見え、観音をまつる古代からの山寺である（標高四八五メートル）。保延五年（一一三九）銘の経筒などが出土した経塚や、『槇尾山小縁起』（平安時代末期）、『槇尾山大縁起』（十三世紀半ば、正平十五年写）などから、千手観音を本尊とする山寺として新たに興隆したことがわかる。その原動力は、十一世紀後期から膝下の池田谷を開発した刀禰や里人らにあった[24]。

中世末期の施福寺参詣曼荼羅（施福寺蔵）には、高所の山上伽藍を大きく描くが、下方（西）には大阪湾沿いの熊野街道が走っている。【図６】左下隅には、『槇尾山大縁起』に照応させて、客僧として施福寺に来た観音が海上で姿を現した、という場面が配されている。槇尾山から海岸までは十五キロメートルほどあって、池田谷の里人にとっても日常の生活圏ではないであろうが、補陀落浄土との一対性を理念上の距離感で思い描き、現実上の広域的結びつきを、熊野街道と海上航路に求めたのであろう。

尾張国甚目寺は、聖観音を本尊とする平野の寺院であ

図６　施福寺参詣曼荼羅（施福寺蔵）

るが、十六世紀の堂塔配置を描く【図7】甚目寺参詣曼荼羅（十七世紀後期写）は、定型にしたがって背後に山を配している。文永元年（一二六四）の年紀をもつ『甚目寺縁起』[25]（十四世紀写ヵ）には、南天竺で造られた観音菩薩が本尊で、「甚目氏龍麻呂」なる「海人」によって海中より網で引き上げられたのだという。南方の伊勢湾海岸線は、今日ほど遠くない。東海道の萱津宿も近く、『一遍上人絵伝』（十三世紀末）によると、宿の有徳人らが甚目寺を支えたらしい。図の左右には川があり、結界の意味もあろうが、東側を南下する庄内川やその支流を連想することができ、伊勢湾とのつながりを示唆しているようである。

以上、東観音寺のような海と近接する山寺、また海との関係性を主張する山寺について、ごくかいつまんで確認した。前節で見た普門寺のように、山麓の村里だけではなく、街道や水運路との結びつきの強い点が、海浜系の山寺を特徴づけている。臨海に孤絶する信仰空間ではないことは確かであり、列島に数多い岬の寺院をも視野に入れた実態解明が必要だが、小稿では典型とも位置づけうる例を見たに過ぎない。

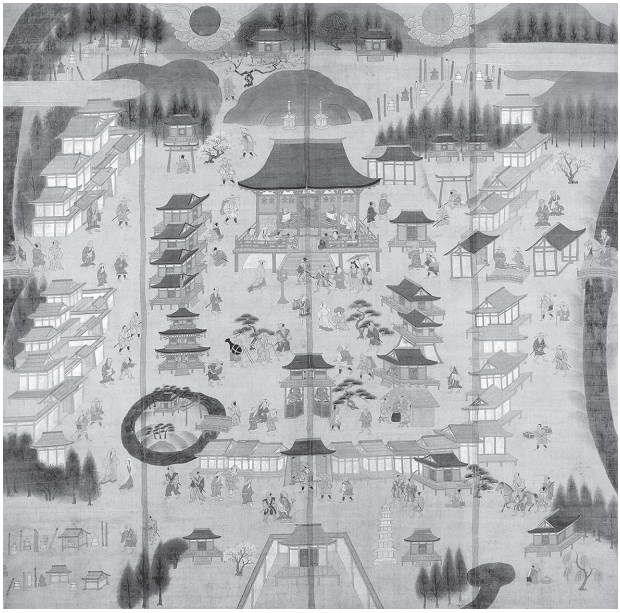

図7　甚目寺参詣曼荼羅（釈迦院蔵）

ただ普門寺や東観音寺の例をあえて一般化してみるならば、前者は里山―山寺―村里、後者は山寺―海辺里―海という結びつきとして理解できる。両者の重なりを考慮して、いっそう単純化してみれば、山寺―里―海という構造が見える。具体性を削ぎ落とした骨格に過ぎないが、それは中世寺院の特徴的型とみなしうる可能性がある。単純な仮説には傍証の探査が課題であるとともに、なぜ中世の村里には寺院が拠点として介在するのか、という本質的問題を考えなければならない。答を出すのは容易でなく、ここでは手がかりの探査に向かうに止まる。

三　三河・尾張の河海と山寺

山寺への視点から中世寺院の特徴を観察すると、直接の基盤である近隣の村里だけでなく、河川や海域を介した広い世界との関係を指摘できる例が、意外に多い。前節までの考察を踏まえ、三河から尾張に探査の範囲を少し拡げて傍証を得たい。

参河国の瀧山寺（岡崎市滝町）は、『瀧山寺縁起』（鎌倉末期）によって、十二世紀以後の再生・発展が具体的に知られる。[26] 本尊は薬師如来で、矢作川の支流青木川に沿う谷間に院坊が展開した山寺である。寺地を中心とする谷一帯は、「寺中」と呼ばれると同時に滝川保でもあり、近世には滝村であったことから、村落を一山に抱え込んだ中世寺院だったことが解明されている。[27]

一方、瀧山寺は、寺院間の広域的な結びつきの一翼を構成していた。『瀧山寺縁起』には、貞応元年（一二二二）の本堂改築に際することとして、「国中在々処々山々寺々令レ沙二汰人夫一者也」と記している。より具体的には、嘉禄元年（一二二五）の本堂供養に請僧六人が参加したとして、「船形（普門寺）寺ノ蓮道坊、今水寺ノ禅定坊、鳳来寺ノ実鏡坊、財賀寺ノ大音坊、真福寺ノ理観坊、真如坊」を挙げている。供養仏事だけでなく、人夫や材木の調達にも諸寺が協力したのかもしれない。宝治三年（一二四九）の三重塔供養には、導師を美濃国櫻堂（岐阜県瑞浪市）[28] の照寂上人が勤めたという。

呪禁師は薬師寺別当法眼信有、請僧六人には真福寺（岡崎市真福寺町）や高隆寺（岡崎市高隆寺町）の僧が加わっていた。この薬師寺は、東海道と矢作川の交点に近い位置にあっらしい。川床遺跡から、「□師寺」等の篦書き銘をもつ平瓦が見出されており、『瀧山寺縁起』に見える薬師寺だと推定する説がある。[29] そうだとすれば、陸路東海道はもとより、矢作川から三河湾への水運とも無関係でない可能性がある。[30]

尾張国春日部郡篠木郷の円福寺（春日井市白山町）は、阿弥陀如来を本尊とし、観音堂に十一面観音を祀る天台の古刹である。建武二年（一三三五）閏十月二十六日雑訴決断所牒には「篠木庄内大山寺幷白山円福寺」と見える。[31] 庄内川の北約一・五キロメートルに位置し、なだらかな丘陵地の岡に建てられている。

天文十七年（一五四八）の『円福寺縁起』には、養老七年（七二三）に観音菩薩を本尊とした建立の由来を記す。[32] それによると、伊勢国安濃津商人たる船頭益直が、尾張国下津で旅宿の折り、東方の内津山あたりの紫雲・光明に気づき、出向いたところ田中松嶋で生身の十一面観音を感得した。伊勢国でまつろうとしたが、観音の意思で船が着岸しなかったので、もとの地に祀ったのが始まりである。その際、「美濃・伊勢・尾張三箇国一揆」して建立したという。寺の地形は、「西南沼地曠曠而不レ堅、東北深山峨々而不レ平」と表現されている。この山寺は、伊勢湾、東海道、木曽川・庄内川等における水運の担い手集団が支えている。十六世紀の経済発展を現実的背景とするのだろう。ただ、建久二年（一一九一）十月日長講堂課役注文[33]には、篠木荘に節器物（白瓷鉢一口、酒瓶一口、酢瓶一口）が課されている。また、暦応二年（一三三九）十二月九日引付方頭人散位某奉書[34]によると、鎌倉円福寺領の富田荘や篠木荘の年貢米に関米を賦課しないよう相模国飯嶋関に命じている。貢納物資の運搬ルートは、詳しい経路は不明ながら、早くから開拓されていたであろう。

また、縁起によると、円福寺の寺地は、二十八部天仙衆が「擲二補陀洛山之塊一塡二土壇一」めたものだといい、同じ意味で「霊台光明山砂鋪」ともいう。本尊について、「南海船師」に喩え、「生身」「瑞像」だという。これらは、補陀落浄土の観音菩薩が現前するという意味づけである。この点は、現存する円福寺の十一面観音菩薩立像（鎌倉時代末期か

ら南北朝時代）に対応している。像高一〇九・六センチメートル、カヤ材素木の一木造りで、赤栴檀に似せた着色、典拠となる容姿の存在を思わせる個性的な重量感など、生身仏の要素が指摘されている。[35] 縁起の思想は、生身の観音菩薩という部分について、中世前期にさかのぼる可能性がある。

尾張国海部郡の萱津宿は、東海道（鎌倉街道）の下津と熱田の中間あたり、下津方面からの五条川と北東からの庄内川との合流地点に位置する。[36] 円覚寺領富田荘の絵図にはその北東方に描かれていることでも知られる。富田荘絵図には、萱津宿の南方に堂塔とともに「成願寺」と記載されている。現在地には自性院（あま市大治町）があり、中世以来の文化財を伝えており、同院は成願寺の系譜を引くものと考えられている。成願寺は、地頭円覚寺や北条氏に庇護された、支配拠点の性質をもっていたことが明らかにされている。[37] 応永二十七年（一四二〇）頃に成立した『自性院縁起』（慶安五年写）は、成願寺の縁起である。[38] 本尊は薬師如来で、縁起では大宝二年（七〇二）の草創と伝える。

縁起には、「北者松竹老檜之陰並レ枝連レ梢」「東者大河流漲波浪蕩々、鎮（トコシナヘニ）数船を渡せり」とある。平地なので山だとは言わないが、鬱蒼とした樹木によって聖地表現とする。河川と渡船については、庄内川の舟運を具体的に想像させる。先にも触れた暦応二年（一三三九）十二月九日引付方頭人散位某奉書は、富田・篠木両荘年貢米の海上輸送を妨げないよう促すものだが、富田荘には弘安六年（一二八三）九月二十一日に、幕府から在所地頭に年貢運上の宿兵士役が命じられ、[39] 年貢運上過書も出された。[40] 応永三十一年（一四二四）五月八日伊勢守護一色義範書状には、円覚寺正続院造営材木を伊勢国桑名より海上を下すとある。[41] 円覚寺は、美濃・飛騨の材木を、庄内川や木曽川水系から伊勢湾へと運ばせている。[42] 富田荘、成願寺、萱津宿は、そのような交通網と結びついていた。尾張国内に限っても、甚目寺や円福寺も含め、水系の活動拠点の拡がりが想像される。関係する寺院は数多いはずだが、もう二例のみ付け加えておく。

東海道鳴海宿に近い尾張国愛智郡の笠覆寺（笠寺、名古屋市南区）は、嘉禎四年（一二三八）十二月の勧進沙門阿願解や『笠寺縁起』（室町時代）[43] によって知られる東海道筋の十一面観音霊場である。本尊は、呼続浦に漂着した桂旦国預山の霊木像だという。

尾張国知多郡の大御堂寺（知多郡美浜町）は、源義朝墳墓の地としても知られる（『吾妻鏡』文治二年閏七月二十二日、建久元年十月二十五日各条）。先にも触れた建久二年（一一九一）十一月日の長講堂課役注文には、「節季物」を負担した篠木荘などとともに、内海野間荘が見えており、河海の水運と関係深い荘園として支配されていた。[44] 大御堂寺は、湾岸荘園の拠点的な寺院であろう。海浜の平地に位置する真言系寺院で、本尊は阿弥陀三尊である。天文三年（一五三四）の『大御堂寺再興勧進状』には、「東南山林双〻梢」「西北蒼海湛〻水」とあり、海に面した山寺であるように表現されている。

以上、三河・尾張の範囲で、しかも限られた例を挙げたに過ぎない。とはいえ概略ながら、理念的に山寺と位置づけられたものや、文字通りの山寺の諸相を知ろうと試みた。それら山寺は、水陸拠点として設営されているとも言える。いわば、山・里・海の結節構造の要として機能しているらしいのである。

むすび

この稿では中世の山寺について、特質の一端を考えてみた。成立史や解体史、また中世前期と後期の違いなど、ここではほとんど述べていない。また、中世寺院のすべてが山寺であるわけでないのは当然である。しかし、山寺が特殊な存在でないことについては、認識を深めるべき段階にある、ということは言えると思う。それは寺院研究においてのことではなく、中世社会研究においてである。中世の山寺は、里山、村里、水陸交通といった場での、社会生活に不可分の役割を果たしていたらしいのである。院坊の展開する伽藍域は、僧侶の生活舞台として、「もう一つの中世社会」であるということについては、[45] すでに中世史研究の一般的認識になっていると思う。しかしなおそれは、寺内という限定領域のことと認識されがちで、寺院史や仏教史を一分野史として切り離す研究傾向は根強い。それは、寺院や仏教が日本中世社会の構造に不可分の存在であったか否かが、なお充分に説明されていないことによるのであろう。

中世の山寺は、地域社会の新秩序を成り立たせる中心的位置に設営される場合が多い。それは、中央権門の系列下にある末寺としてや、行政機構たる国の配下にある寺院としてというより、地域側が主体となった生産・分業・流通の展開を支える寺院としてであろう。

しかし、なぜ寺院を組み込む必要があるのか。この単純で本質的な問いは、必ずしも充分に意識されていないし、また難問でもある。永原慶二氏の論文「戦国期伊勢・三河湾地域の物資流通構造」（前掲）は示唆的である。永原氏は、「伊勢・濃尾・三河の河川流域諸平野の生み出す物資は、河川・海上交通によって一体的な流通圏として結合されていた」、と述べられた。そのような実態をもたらせた要因について、「尾張・三河を始めとする当地域の高い生産力とともに、河川・海上の結合した物資流通網の発達であった」、と結論づけられた。具体的な分析を踏まえたこの見解は、政治経済、物資流通、陸海交通の問題としての議論を代表していると思う。この議論の一部として解明されたのは、港津都市である。伊勢国の桑名、安濃津、大湊、尾張国の熱田、大野、三河国の大浜、その他である。永原氏は、桑名などを発展させた主体を、実力伸張した武士的豪族的商人だと述べておられるが、これは網野善彦氏が平和・自治の本質を重視したことへの批判であって、議論の焦点が港湾都市にあることをよく示す。[46] 蓄積されてきた重要学説は、寺院史や仏教史への関心を欠いた議論であることがわかる。

このような研究史を念頭に置きつつも、寺院や仏教への関心から、社会史や地域史の観点を可能な限り考慮し、あらためて検討しようとした。実態として、寺院や仏教が占める比重は無視できないと思う。山寺の事例を検討した限りでは、それらが地域社会や分業流通の結節点に設営される場合が多い。そのような構造的特質は、中世社会を理解する上での本質的問題なのかもしれない。本格的には今後の課題だが、探究の視点は考えておきたく思う。

抽象的なことだが、仏教の没派閥性は、道俗上下貴賤の結縁という形式の拠り所とされやすい。権力側の融和政策に利される場合と、被支配身分の結束理念に用いられる場合があるが、汎用性ある結縁理念を必要とする諸社会集団の時代的性質を表している。一方、仏教思想は、地理的空間の拡がりをもっている。補陀落信仰の場合、南海の観音浄土と

いう理念上の聖地との関係だけでなく、東観音寺と熊野那智のつながりや、中国の海上観音聖地たる普陀山（浙江省舟山群島）を一拠点とする海域世界など、現実の広域世界との結びつきがある。霊験所の巡礼や、瀧山寺（西三河）・普門寺（東三河）・櫻堂（東濃）・大福寺（遠江）などの協力関係は、日常生活を越えた活動形式の例である。

日本中世では、諸集団内部の結合や、広域活動世界の形成といった、それぞれ自律的活動の場面で仏教の形式が用いられ、拠点としての寺院が設けられることがあった。中世国家の列島各地における職権は弱い一方、各地では自律的な諸集団が地域性をもって成立してくる。諸地域では、自ら形成させる公共空間を観念的に保障する媒体として、仏教と寺院が重要な役割を果たし得た。古代国家による仏教の行政的普及策を前史にもつという条件と、個別権力の党派性を越えた世界宗教の経典に正統性を求め得たからである。

註

（1）時枝努『山岳考古学』（二〇一一年、ニューサイエンス社）、櫻井成昭『六郷山と田染荘遺跡』（二〇〇五年、同成社）、後藤健一『大知波峠廃寺跡』（二〇〇七年、同成社）、網田龍生『池辺寺跡』（二〇〇九年、同成社）。

（2）近年の報告書等に限っても、首羅山遺跡（福岡県久山町）、大山寺僧房跡（鳥取県大山町）、槇尾山施福寺（大阪府和泉市）、白山平泉寺旧境内（福井県勝山市）、上市黒川遺跡群（富山県上市町）などがある。なお、「山の寺」科研の総括シンポジウム資料集『中世「山の寺」研究の最前線』（代表 仁木宏、二〇一一年）によって、各地の研究状況を知ることができる。

（3）上原真人「古代の平地寺院と山林寺院」（『佛教藝術』二六五、二〇〇二年）、上原真人・梶川敏夫編『皇太后の山寺』（二〇〇七年、柳原出版）。

（4）久保智康「国府をめぐる山林寺院の展開」（『朝日百科日本の国宝別冊・国宝と歴史の旅3　神護寺薬師如来の世界』一九九九年、朝日新聞社）、同「古代山林寺院の空間構成」（『古代』一一〇、早稲田大学考古学会、二〇〇一年）、同「古代出雲の山寺と社」（『大出雲展』二〇一二年、京都国立博物館・島根県立古代出雲歴史博物館）。

（5）水野章二『中世の人と自然の関係史』（二〇〇九年、吉川弘文館）、同「近江国河上荘の湖岸と後山」（同編『琵琶湖と人の環境史』二〇一一年、岩田書院）、同「古代・中世における山野利用の展開」（湯本貴和編『里と林の環境史』二〇一一年、文一総合出版）。

（6）荒井信貴「西三河の山寺」、岩原剛「東三河の山寺」、石川明弘「三遠国境の山寺」、松井一明「遠江と駿河の山寺」、三河山寺研究会「山寺資料集」などを含む。

（7）薬師如来をまつる天台系寺院が多いことについては、『新編岡崎市史　中世２』（一九九八年、新編岡崎市史編さん委員会）第一章第三節（新行紀一氏執筆）参照。

（8）三河山寺研究会・三河考古学談話会『三遠の山寺』（レジュメ集、二〇一〇年）、『愛知県史資料編４　飛鳥～平安・考古４』（二〇一〇年、愛知県）のほか、「三州大岩寺千手観音象（ママ）記」（『懶室漫稿』第七、『愛知県史資料編９』四五七～四五九ページ）、「三川三箇根寺化修造序」（『天隠和尚文集』、『愛知県史資料編14』「語録・文集」）、「大象山龍田院縁起幷鼻祖希声禅師行状録」（『愛知県史資料編11』二七八～二八一ページ）を参照した。

（9）佐佐木信綱校訂『新訂　梁塵秘抄』（一九五六年、岩波書店）。番号も同書による。

（10）保延六年（一一四〇）八月九日僧西念願文（『平安遺文』十―補六四）など。

（11）坂本幸男・岩本裕訳注『法華経(下)』（一九六七年、岩波文庫）。観音信仰については、小林太市郎『小林太市郎著作集７　仏教藝術の研究』（一九七四年、淡交社）参照。

（12）『豊橋市史　第五巻』（一九七四年、愛知県豊橋市）と『愛知県史資料編14　中世・織豊』（二〇一四年、愛知県）「寺社縁起」に翻刻がある。井上佳美「『舩形山普門寺梧桐岡院闘闢之縁起由来』についての基礎的考察」（『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』一一、二〇一〇年）参照。

（13）標高二六〇メートルの船形山は、東西二か所の峰を結ぶ凹曲した稜線からの連想による命名である。『法華経』「普門品」は『観音経』とも呼ばれる。

（14）化積上人については、四至注文写木札の前書き部分にも見える。下半部を欠失しており、なお検討課題である。上川通夫「三河国普門寺の中世史料」（同『日本中世仏教と東アジア世界』（二〇一二年、塙書房）、同「永暦二年（一一六一）永意起請木札をめぐって」（『木簡研究』三六、二〇一四年）。

（15）岩原剛・村上昇「三遠国境の中世山寺遺構」（前掲）。

（16）岩原剛「普門寺旧境内」（『愛知県史資料編４　考古４』前掲）。

（17）上川通夫「国境の中世寺院―三河国普門寺―」（愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科編『国境の歴史文化』二〇一二年、清文

堂）、同『日本中世仏教と東アジア世界』（前掲）第Ⅲ部。

(18) 『中世荘園絵図大成　第一部』（一九九七年、河出書房新社）によった。

(19) 大石雅章「中世大和の寺院と在地勢力―西大寺を中心として―」（同『日本中世社会と寺院』二〇〇四年、清文堂）。

(20) 『豊橋の名宝Ⅰ　東観音寺展』（二〇〇〇年、豊橋市美術博物館）参照。同書には、和田実「東観音寺略史」などの論考が含まれており、参考にした。また、第五二回中世史サマーセミナー（二〇一四年八月二十七日、於愛知県蒲郡市）における綿貫友子氏の報告「中世伊勢海運と尾張・三河」からも学ばせていただいた。

(21) 内題は「参河国渥美郡小松原東観音寺縁起序」。『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。

(22) 他には白山妙理権現、富士浅間大菩薩、出雲大社、宇佐大菩薩、賀茂大明神、松尾大明神、平野大明神、山王権現、諏訪大明神が挙げられている。海運等と無関係でない神も含まれているであろう。

(23) 以下、東観音寺文書は、『豊橋市史　第五巻』と、『愛知県史資料編』の編年該当箇所に、それぞれ翻刻されている。

(24) 山下有美「古代中世の寺院社会と地域」（『歴史評論』六二三、二〇〇二年）、和泉市史編さん委員会『和泉市の歴史1　横山と槇尾山の歴史』（二〇〇五年、和泉市）、同『和泉市の歴史6　和泉市の考古・古代・中世』（二〇一三年、和泉市）。

(25) 『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。

(26) 『新編岡崎市史　史料・古代中世』（一九八三年、岡崎市史編さん委員会）、『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。

(27) 服部光真「『瀧山寺縁起』と中世の地域社会」（『年報中世史研究』三八、二〇一三年）。

(28) 『櫻堂薬師一二〇〇年展』（二〇一二年、瑞浪市陶磁資料館）。

(29) 斎藤喜彦「矢作川河床遺跡と遺物」（『岡崎市史研究』五、一九八三年）、『新編岡崎市史　中世2』（前掲）第一章第三節（新行紀一氏執筆）、『天台のほとけ―その美術と三河の歴史―』（二〇〇三年、岡崎市美術博物館）。

(30) なお、三河国普門寺に関係する例として、応永二十四年（一四一七）に、遠江国大福寺の修理費を普門寺僧大全や冨賀寺僧実誉が分担している。『瑠璃山年録残編』（『静岡県史資料編5　中世1』一九八九年、静岡県）一六二一号。

(31) 円覚寺文書。『愛知県史資料編8　中世1』（前掲）所収。

(32) 『春日井市史資料編』（一九六三年、春日井市）、『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。また『円福寺遺芳』（一九八四年、円福寺）には、全文の翻刻と写真を載せている。

(33) 島田文書。『愛知県史資料編８　中世１』（前掲）所収。
(34) 円覚寺文書。『愛知県史資料編８　中世１』（前掲）所収。
(35) 『愛知県史別編　彫刻』（二〇一三年、愛知県）、三〇ページ、二三八ページ、四八二ページ。
(36) 萱津宿については、蔭山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・鈴木正貴・松田訓「中世萱津を考える」（『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』八、二〇〇七年）参照。
(37) 上村喜久子「絵図にみる富田庄の開発と形成」（同『尾張の荘園・国衙領と熱田社』二〇一二年、岩田書院）。
(38) 『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。大治町文化財展展示解説書『自性院―祈りとほとけさま―』（二〇一三年、大治町教育委員会）参照。
(39) 幕府奉行人左衛門尉某書下。円覚寺文書。『愛知県史資料編８　中世１』（前掲）。
(40) 円覚寺文書。正和四年（一三一五）十二月二十四日円覚寺文書目録に「富田庄年貢運上過書」が見える。『愛知県史資料編８　中世１』（前掲）。
(41) 円覚寺文書『神奈川県史資料編３　古代・中世三』（神奈川県企画調査部県史編纂室）、五六八〇・五七二七。綿貫友子氏の研究報告によって知った。註(20)参照。
(42) 綿貫友子「尾張・参河と中世海運」（同『中世東国の太平洋海運』一九九八年、東京大学出版会）。
(43) 前者は『愛知県史資料編８　中世１』（前掲）、後者は『愛知県史資料編14　中世・織豊』（前掲）「寺社縁起」所収。上村喜久子「地方寺院縁起の展開と地域社会―笠寺縁起と熱田社―」（同『尾張の荘園・国衙領と熱田社』前掲）参照。
(44) 註(33)。綿貫友子「尾張・参河と中世海運」（前掲）、同「中世伊勢海運と尾張・三河」（中世史サマーセミナー報告、前掲）。
(45) 黒田俊雄『寺社勢力』（一九八〇年、岩波新書）。
(46) 網野善彦「中世都市論」「伊勢国桑名」など、同『日本中世都市の世界』（一九九六年、筑摩書房）。

図版出典　本稿の図版は以下の先行所より引用・掲載した。
1〜3　『中世荘園絵図大成　第一部』（一九九七年、河出書房新社）
4〜7　大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』（一九八七年、平凡社）